



小雨

答えは道の真ん中に

如月郁美のあの名前には『ニガツ』である。
小学校の国語の時間で呼ばれる度に、ニガツって言うな、
上がった。逆効果の典型である。
たのんだ。彼女が終わった頃には、僕らは結構話す間柄にな
五月の連休が終わった頃には、僕らは結構話す間柄にな
「そういえば、ニガツって本好きなの一？」
「ニガツって言うな。如月って言え」
書架整理をしながら返事がくる。図書委員は月に二回
さされた本を棚に戻す日があって、今日は後者のほうだ。
キュルキュルと本をたくさん積んだカートを押す。52
の棚だ。仕方なくまたカートを押し移動する。
「あたしはあんまり本好きじゃないよ。清水と一緒に」
「じゃあ何で図書部員やってるの？ そっちは立候補だ
「パソコンが好きだから」
その返事を聞いてカウンセターにある機械を思い出す。
はスーパ一のレジのようには貸し出しカードと本のバーコ
「あれ？」
「そう、あれがやりたかったの」
「変な奴」
ニガツの返事が来なかったのでも顔を上げると、彼女は
ンターの手前、辞書の棚の前に一人の男子生徒が立って
「タケだ」
「武田？ 知り合い？」
「違う、『タケ』。隣のクラスの志井巧。小学校が一緒
「何で『タケ』？」
「みんな『シイタケ』って呼ぶのが面倒くさくなったの
タケ、と呼びかけてニガツは手を振る。気づいた彼は
「ニガツじゃん。何か久しぶり」
「ニガツって言うな。こっちはうちのクラスの清水。同
「どうも、清水です。家は商店街で眼鏡屋をやってます
「あーもうまた始まった。タケ、気にしなくていいから
ニガツに叩かれて僕はしぶしぶ店の宣伝を止める。タ
「お前面白いな、清水」
「そりゃどうも。ええっと、タケ？」
「うん、『タケ』でいい。本当は志井巧だけど誰も呼ば

「で、何やっつてたの？ あんたが図書室に来るなんて珍
言われてみれば、と僕は思う。タケは手足も長く、顔
「ちょっと困ったことがあってさ」
「何？」
「ここだけの話にしてくれる？」
僕とニガツは頷き耳を寄せた。
「ある女の子に告白しようと思って、その子に『好きな
好きな人は道の真ん中にいるよ』って」
ニガツは持っていた本でタケを叩いた。タケは驚いて
「何するんだよ」
「色気づきやがってこのやろう！」
「うるさいな、いいだろ。もう中学生なんだから。お前
「松下くん？」
「こいつ小6の時に言ったんだよ。『私が好きなのは松
「わーわーわー！ タケ、その話は忘れろ！」
「え？ うちの中学？」
「らしいぜ。同じ中学だから嬉しいって言って...」
「黙れタケ！ 清水も話に乗るな！ もう、松下のこと
「何だ、振られたのか」
「絶賛片思い中です。でも、もういいからそれは！」
「図書委員！」
ビクリとして僕とニガツは飛び上がる。恐る恐る振り
「図書室では静かに」
「はい...」
僕とニガツはそそくさと書架整理に戻り、タケも辞書
「というわけなんだ」
一緒にお昼を食べながら僕は昨日の放課後の出来事を
「お前、プライベートって言葉知ってる？」
「知ってる」
沢野とは中学に入ってから最初に仲良くなかった。沢野はと
が『動』のかわさなら、沢野は『静』のかわさ
馬鹿話もしたりする。そんな沢野のことを、僕はとにか
「如月の好きな奴の名前、オレにばらしてもいいわけ？
「だって僕の知らない人だし」
「オレは知ってるかもしれないだろう。オレは如月たち
ラスが違ったから喋ったことはあんまりないけど」
「松下ってどんな奴？」

あ の ニ ガ ツ が 好 き に な る 奴 な の だ 。 ど ん な 子 が 非 常 に
し か し 、 沢 野 は 首 を 傾 げ た 。
「 松 下 な ん て う ち の 学 年 に は い な か っ た ぜ 」
「 そ う な の ? 」
僕 も 首 を 傾 げ る 。
「 っ て こ と は 先 輩 か な あ 」
「 か も な 」
興 味 な さ そ う に 沢 野 は 弁 当 の 卵 焼 き を 口 に 入 れ る 。 沢
れ て い る か ら と て も お い し そ う だ 。
「 で も 、 如 月 が 『 松 下 』 っ て 呼 び 捨 て に し て た な ら 同 い
な い 」
「 あ 、 そ っ か 」
今 度 は 僕 が 同 じ 小 学 校 だ っ た 奴 を 思 い 浮 か べ る 。 松 下
。 次 の 日 の お 昼 は 図 書 委 員 会 が あ っ た の で お 弁 当 を 持 っ
図 書 室 で 騒 ぐ 生 徒 を ど う 注 意 す る か 』 。 僕 と ニ ガ ツ は 顔
話 し 合 い も 終 わ っ て ニ ガ ツ と 一 緒 に 会 議 室 を 出 る と 、
声 を か け た 。
「 あ 、 清 水 。 そ れ か ら ニ ガ ツ 」
「 何 や っ て る の ? 」
ニ ガ ツ は 怖 い 顔 で タ ケ を 睨 ん だ 。 何 故 そ ん な 顔 を す る
「 こ の 前 言 っ た だ ろ 。 道 の 謎 を 調 べ て る 」
「 辞 書 で ? バ ッ カ じ ゃ な い の 。 あ れ は 謎 か け よ 」
「 謎 か け ? 」
「 な ぞ な ぞ っ て 言 い 換 え て も い い わ ね 。 あ ん た っ て 、 い
も う 一 回 よ く 思 い 出 し て み な さ い よ ! 」
言 う だ け 言 っ て ニ ガ ツ は 出 口 の 方 へ 大 股 で 歩 い て い く
「 ニ ガ ツ 、 何 怒 っ て ん の ? 」
「 さ あ 」
「 そ う い え ば 、 今 日 は 『 ニ ガ ツ っ て 言 う な 』 と 言 わ な か
「 な あ 、 清 水 。 道 の 真 ん 中 っ て 何 が あ る ? 」
タ ケ は そ う 僕 に 尋 ね た 。
『 私 の 好 き な 人 は 道 の 真 ん 中 に い る よ 』 。 タ ケ が 好 き
「 え え っ と 、 中 央 分 離 帯 か な 」
「 清 水 、 難 し い 言 葉 知 っ て る な 。 中 央 分 離 帯 か あ そ
「 さ あ 」
二 人 で 首 を 捻 る 。 キ ン コ ン カ ン コ ン と 昼 休 み の 終 わ り

「と、いうわけなんだ」

「もう一度聞かなくが、お前プライベートって言葉知ってる」

「だから知ってるって」

放課後。今日はクラブはない日。教室に居残って週番の話をする。と、沢野は呆れたように肩をすくめる。

「な、あ、沢野ならわかるんじゃないの？」

「わかっただよ」

「マジで！道の真ん中って何？」

「少なくとも中央分離帯じゃない」

日誌をパタンと閉じ、沢野は言った。

「な、あ、清水。オレが答えを言ったらお前は志井に教えてる。志井が答えを見つけてなきゃ意味がない」

「そうだけど...」

僕は唇を尖らせる。沢野は頭をかいて言った。

「じゃあ、ヒント。紙に書いてみればわかる」

「紙？」

「それ以上は教ええない」

シャーペンを筆箱に片付け鞆に入れる。沢野は立ち上

それから、タケと会ってゆっくり話す機会もなかった。最近機嫌の悪いニガツに聞くわけにもいかなかったし、『モヤモヤしたまま過ごしていると、カウンタ一当番の』

に、それぞれ座る。

放課後、人が途切れた合間を見計らってニガツが口を

「タケのことだけどさ、前言ってた彼女と付き合うこと

「え？そうなんだ」

素直に驚く。道の謎は解けたのだろうか。そう尋ねる

「解けたよ。だってあたしが教えただし」

『道』って書いてみよ、とニガツが言った。僕は首を

字を書いたが、全く意味がわからなかった。

「漢字じゃないよ、口一マ字」

「口一マ字？」

ニガツは手近にあったメモに『m i c h i』と書いて

「真ん中の文字は？」

「C... あ、志井？」

「そう言うこと」

『私の好きな人は道の真ん中にいるよ』とは、『私の
「ややこしい。はっきり言えばいいのに」
「自分のことが好きだって勘づいてたんじゃないの？」
」

「そう言うこと言うなって。タケがかわいいそうだろ」
ニガツはだらんとカウスターに突っ伏した。お行儀が
しばらくして、本を片手に沢野がやってきた。
「清水、貸し出しお願い」
「了解」
ピ、と本の背表紙に貼られたバーコードを読み取る。
「そういえばさ、タケ、女の子と付き合いだしたんだっ
声を低めて僕は言った。
「ふうん。謎は解けたのか？」
「うん。ニガツが教えてあげたって」
沢野はべったりと机に張り付いたままの彼女を横目で
「じゃあオレからもひとつ。松下という名前の男子はう
「そうなんだ」
ニガツの好きな人の話を思い出し、僕は再び首を傾げ
「清水、お前は『松竹梅』って言葉を知ってるか？」
貸し出し手続きを終えた本を持って、沢野は図書室を
。松竹梅。『松』の下は『竹』。つまり、ニガツが好き
何を言っているかわからず僕は困った。けれど、何
「あのさ、ニガツ...」
「ニガツって言うな」
首だけ上げてこっちを見、ニガツはにやりと笑った。

(終)

夏休みは卒論のために毎日のように学校へ通った。私
はその頃が山場に追いついた。その夏のあの日、突然ぐっさんと
した。精神三分後に、二手に分かれていた森田からメールを
は、フェを食べない話をした。その日一日は終わった。ぐっ
は取り留めの日には豪華だった。森田がフットサルのサーク
、学園祭の作った食べ物は豪華だった。森田がフットサルのサーク
文部のそれを食べ前夜は修羅場だった。深夜零時、プリンタ
が卒論の提出前夜は修羅場だった。深夜零時、プリンタ
ろおろす無事に卒論はなかつた。袴姿の私とぐっさん、ス
ン卒業式の日には涙はなかつた。袴姿の私とぐっさん、ス
卒業じゃあまた。いつものようにそう言って別れた。

私たちはそう、研究室の友人だったのだ。

「タブレットの上」に置いていた携帯が音を立てる。メールが来
「タイムリー」にコヒーを一口飲んだ森田が「ん？」と
「ぐっさんからメール」
「メールするんだ。やっぱいいなあ、女の子同士って
よく言う。ぐっさんも私も互いを友人だとは思っていたが、今ま
最近、それも理由があったのだ。彼女は今、高校で数学教師をしてい
故に研究室で決定権はぐっさんが握っていた。任せ
女にはあったからだが、『夏休みのエスケープ事件』が
そのなぐっさんだが、『夏休みのエスケープ事件』が
時代、付き合っていた。彼氏と別れる時は壮絶だったと記
「でさあ、今日呼び出したのは他でもないんだけど...
ゆったりと森田は口火を切った。そして、少し躊躇う
優柔不断さ。こんな悪い癖も昔から変わっていない。飛躍
研究室の決定権はぐっさんの次に私が持っていた。飛躍
性格なのだ。決め前にはあれこれと考えてしまい、飛躍
レてもコヒーを飲んだ。森田の顔からやや視線を外し

「ニシケイは聞いてるよな、その...」
「聞いてるわよ。そんなことも知らずに呼び出したの？
愛想笑いを浮かべる森田にため息をつく。
「いや、多分聞いてるだろうとは思ってたからさ。だと
うし」
「そうね。でも、私はこれから何を相談されるのかわか
「ああ、うん...」
森田はまたコヒーをかき回し始めた。
私は携帯をちらりと見た。
優しいが、少し優柔不断なこの男。大学生の頃は「あ
ぐっさんはよく彼と付き合っただけでいられたものだ。
結婚、考えてるんだ」
「ふうん、いいんじゃない」
「でも、ほら、ニシケイも知ってる通り泰子はああだかな
仕切りたがり屋の彼女がそれに関して何も言い出さな
気はないのかも。しれない。
今日呼び出された理由であろう、そんな愚痴を聞き流
れが、今原口泰子にぐっさんというあだ名をつけたのは実は森
この二人は本当に付き合ってるんだ。初めてそう実感
「ぐっさんは待ってると思うよ。そういうことは男の方
「...」
「...」
「そうよ。森田くんだったってわかってるんでしょ」
コヒーをかき混ぜながら森田は考える。
私だってわかってる。彼は誰かに背中を押してもら
携帯を開いた。
受信箱にはぐっさんの名前が並ぶ。それらは全て『森
ただ、さっきのメールは違った。『森田と会うの何度
修羅場に巻き込まれるのは勘弁だな、と思いがら優
あ頃の森田は異性だというこのことを感じさせない男だ
うにしていたのだから、暗黙の了解で互いに異性を感
感じていたのだろう。彼は優しくて掛け値なしの
卒業の後、何かがあれば私とぐっさんの立場は逆だっ
、森田とぐっさんの間にはその何かがあったのだ。

冷めてしまったコーヒーを飲み干す。森田は心を決め
三人の関係は少し変わってしまった。
ただ、私にとって二人が、研究室の友人であることに

(終)

トイ・プードルが知っている

私の名前は高枝こずえ。どうして名字が『高枝』なの
と要約すると、ひいおばあちゃんの名前をもらった、その
に職業は中学生。成績は優秀な方で生徒会長もやっていた
にしましてはい、陸上部の部長。運動場使用禁止令はまだ
そこまで思いをめぐらして、息を一つ吐く。大丈夫、朝
ついで先ほどの前には何が変わりもない平和な火曜日の朝
した。玄関の前には奴がいた。目の前の奴がいたからマン
奴の名前はそう。

小型犬。

いろいろな種類があるらしいけれど、よく知らないし
型犬で充分だ。小さい黒い目でじっとこちらを見つめてく
こちらに近づいた。同じだけ私は下がっている。目は逸らさな
家族以外は知らないが、私は犬が嫌いなのである。吠え
かまのよきに吠えるのだ。ワンワン、ギャンギャン、キャ
その声に反応して... ..と辺り一帯で犬の大合唱が巻き起
犬は嫌いだ、吠えるから。犬は嫌いだ、言葉が通じな

大きくなっただけから以前のように吠えられなくなっ
きになるつもりも、好きになる理由もない。理由がそこ
い主、カゴに入れないで抱っこしてバスに乗る飼い主が出
奴らは獣。何を考えているのかわからない。突然暴れ出し
そして、この小型犬も首輪はつけているがリードはし

じりっと、奴がまた一歩こちらに近づいた。私もまた

落ち着け、私。落ち着け。
そう、私の名前は高枝こずえ。どうして名字が『高枝
「会長一？何やってるんですか？」
呑気な声が聞こえた。あの声は、一年の副会長、杉山
「おはよう、杉山くん」

私は奴から目を逸らさないまま挨拶する。
「おはようございませう。あ、トイ・プードルだ」
視界の中に杉山くんが入ってきた。やおら、彼は屈んだ。
「かわいいっすねー。会長の犬ですか？」
「違うわよ」
「あー会長の家、マンションでもんねー。にしても、
僕の夢は、でっかい庭付きの家で奥さんと三人の子供と
でもトイ・プードルもいいなあ」
くるりと杉山くんは振り向く。その手に奴を抱いて。
「会長はおっきい犬とちっこい犬とどっちが好きですか
杉山くんが奴を私に近づけてくる。ピシリ。凍った。
ど目だけは逸らさない。目を逸らしたら負ける。
「リボンちゃん、ここにいたのね」
近所のおばさんの声がした。杉山くんはくるりと右を
「あ、飼い主さんですか。かわいいですねーこの子」
「でしょ。リボンちゃんは我が家のアイドルなのよね。
よかったわね」
杉山くんがおばさんに奴を返す。おばさんは奴の足を
「また遊んであげてね」
「はい。バイバイ、リボンちゃん」
奴は去った。ようやく、私の体から力が抜ける。
大きく振っていた手を下ろし、杉山くんは残念そうに
「あーあ、かわいいかったのに」
「どこが？」
「学校行こうか」
ため息をかみ殺して私は話題を変える。予定時刻より
。並んで歩き出す。杉山くんがクリクリとした目をこち
「会長にも弱点があったんですね」
「いいじゃない、別に」
何故か楽しそうに杉山くんには私は苦い顔で答えた。
「もちろんいいですよー。会長はいつだって冷静で隙が
このこと誰にも言いませんからね。会長のイメージが崩
「言っても別にいいわよ。あえて言うようなことでもな
「いやいや。僕、協力しますよ。会長に」
「いつにも増して陽気な杉山くんが微笑ましくて、私

次の日の放課後、生徒会室に行くと壁に大きな犬の力
杉山くんが持っている。和むよね」私にも写真やテレビの犬は大
「この会計の言葉に頷く。流石の私も写真やテレビの犬は大

そのまた次の日、生徒会室に行くと会長机の上に卓上
方が大きいものだ。
「それ、杉山が持ってきたんですよ」
一年の書記の子が教えてくれる。予定を書き込むスベ
にあげた。

そしてまた次の日、会長の椅子に座って顔を上げると
傾向から誰が貼ったものかわかる。

「杉山くん」
名前を呼ぶと一年の副会長はにこにこしながらやって
「何ですか？」

「カレンダーはともかく、あんまり不要なものを生徒会
「え？だっ...」

杉山くんは辺りを気にしながら声をひそめる。
「会長が喜んでくれると思って」

何故。
「あ、ポスターじゃ満足できませんか？　ですよね、わ
何を。

そんな話をしている間に、会計と書記が連れ立って出
た杉山くんはいそいそとポケットの中からチケットを取

「ちょうどよかった。誘おうと思っただんです」
杉山くんは黒いクリクリした目を輝かせ言う。

「今度の日曜日、暇ですか？」
「...暇だけど」

「僕と一緒に出かけませんか？」
小さく黒いクリクリした杉山くんの目。既視感。何

「会長に喜んでもらおうと思って割引券を手に入れたん
笑いながら杉山くんはチケットを差し出す。受け取っ

ドックランド割引券

「え？」
直訳すれば、犬の広場。

「こ　こ　っ　て　…　…　」
「犬と遊べる施設ですよ。二つ向こうの駅前にあるじゃ
キラキラ輝く杉山くんの出した。数日前の朝に会った、リ
何に似ていった。ホッとしたんですよー」
後ろに下がった。杉山くんは笑って言う。
「それらに構わずで」
「会長が犬好きで」

はっ？

「いけ　ない、いけ　ない。思考が完全に停止した。私の名
会長は『生き物？だから？』って感じの人だと思って
大好きだったんですねー犬。あ、猫はどうですか？
きじゃないから」
「ちよ　っ　と、待　っ　て　く　れ　る　？　」
立て板に水。杉山くんの話に無理やり割り込む。
「何で、そう　思　う　わ　け　？　」

「え？　だ　っ　て　」
杉山くんの黒い目が楽しそうにクリクリ動く。
「リボンちゃん　と　ず　っ　と　見　つ　め　合　っ　て　た　じ　ゃ　な　い　で　す　か
「…　…　」
見　つ　め　合　い　。
確　か　に　私　は　『リボンちゃん』　か　ら　目　を　逸　ら　さ　な　か　っ　た
い　に　は　程　遠　い　オ　ー　ラ　を　出　し　て　い　た　は　ず　な　の　に、杉山くん
「人　前　で　『か　わ　い　い　～』　と　か　言　っ　た　り　し　た　ら　イ　メ　ー　ジ　崩
で　し　ょ　。　そ　れ　で　葛　藤　し　て　見　つ　め　合　っ　て　た　ん　で　す　よ　ね　。　可
や　け　に　饒　舌　な　彼　か　ら　ま　た　数　歩　下　が　る　。
あ　あ、そ　う　か　。　私　は　納　得　し　た　。　杉　山　く　ん　は　犬　が　大　好　き
犬　が　好　き　だ　か　ら　嫌　い　な　人　が　い　る　な　ん　て　想　像　も　出　来　な　い
は　き　っ　と、リ　ー　ド　を　外　し　て　散　歩　を　す　る　飼　い　主　や、抱　っ　こ
「杉山くん」

「は　い　」
小型犬の瞳を持つ彼は喋るのを止めて身を乗り出す。
「私　は　ね、犬　が　嫌　い　な　の　」
その目がきょ　と　ん　と　な　っ　た　。
「あ　れ　は　見　つ　め　合　っ　て　た　わ　け　じ　ゃ　な　く　て、硬　直　し　て　た　の
い　の　。　私　は　こ　こ　へ　は　行　け　な　い　わ　」

「そっ」とチケッ トを返す。杉山くんは茫然としながら、「悪いけど...」

「はい...」

踵を返した彼はのろのろと自分の席へ向かう。気がつ

新しい一週間が始まった。月曜日の放課後。生活指導

生徒会室に行くのが少し遅れてしまった。

「遅れてごめん」

生徒会室のドアを開けると杉山くんが一人でいる。彼

何か変わったことは？」

陸上部の部長から運動場使用の件に関して異議申し立

破って捨てといて」

「はい」

会長机に座り、ふと上げた私の顔が引きつった。目の

杉山くん、これは... ..？」

「キャバリア・キング・チャールズ・スパニエルです」

「それは何の呪文？」

「犬種です」

小型犬は小首を傾げてポスターの中からこちらを見て

犬の名前は聞いてないの。これは一体どういうこと？

「僕はあれからいろいろ考えました。どうしたらいいの

杉山くんは立ち上がって、バンとポスターを叩く。

「会長、習うより慣れよ、です」

自信満々の彼の言葉にとてつもなく嫌な予感がした。

「会長が犬嫌いなのは怖いからだと言いましたよね。で

から」

「いや、ポスターは大丈夫なんだけど... ..」

「じゃあ行きましょう、ドックランドへ。小型犬の赤ち

「いやよ」

「そこを何とか！」

「犬が嫌いでもいいじゃない。犬好きの人に迷惑はかけ

「駄目です。会長が犬を好きになっくてくれないと僕が困

「何で？」

「前にも言った僕の夢です」

「夢？」

『僕の夢は、でっかい庭付きの家で奥さんと三人の子供

小型犬と同じ瞳がこちらを見つめてくる。小さくて黒
犬は苦手だ、吠えるから。けれどその実、一番苦手な
扱
い方がわからない。私に擦り寄ってくるなんて、何を
睨み合いは出来ない。見つめることはもちろん出来な

その後の私がどうなったのかは、トイ・プードルの目

(終)

兄嫁

高いところから身を投げた。あの時、十年上の兄がそう言った。その場所がデパ一

「冗談だよ、伸二」

しかしまた帰りの駅で兄は飛び込みを夢想し、僕は再

学校帰りに駅前の喫茶店に寄った。暗い店内に先客は

カフェオレを注文して彼に近づき、向かいの椅子に腰を

「兄さん、待たせてごめん」

食事中の兄は軽く頷いて僕の言葉に応えた。口があ

の入ったバックを手渡した。

大学で近代文学を研究している兄は大切な論文を書く

常に微妙なので早く教授の地位が欲しいのだそう。教

「論文の調子はどうか？」

カレーライスを食べ終えた兄の口元が歪んだ。

「まあまあだ」

弟の頭を馬鹿にしている兄だから、そんな返事しかし

兄は安物のタバコに火をつけた。僕は忘れないうちに

「昨日、七緒さんから電話があったよ。式の話だから先

「ふうん」

兄は興味なさそうに口ぶりで煙を吐いた。それで僕

「本当に結婚するの？」

「するさ。先方も乗り気だしこちらも断る理由はない」

「断る理由がないから結婚するの？」

兄はタバコを灰皿に押しつけこちらを見た。眼鏡の奥

るのではないかと身を強張らせた。

「高校生には難しい話だ」

僕はとても個人的な理由から兄が七緒さんをどう思っ

「兄さんは七緒さんのことが好きなの？」

「嫌いな人間とは結婚しない」

時計を確認した兄は席を立ち精算をすませ出て行く。

今になって運ばれてきたカフェオレを吸い込む。苦い

次の日から定期試験が始まった。得意ではない古典と

くれたのは母でなかった。

「お母さんは急な用事でおでかけですよ。あなたが帰っ

七緒さんはそう言っていて笑った。口の端をちよつと上げ
顔立ちはだから笑っていても少し切ない。一ハンを温めま
「お腹すいたでしよ。お母さんのチャーハンを立つち
制服から着替えて食卓につくころには湯気の立つチャ
さんは湯飲みを持って向かい合わせに座る。
「今日はお昼までですか？」
「期末試験です」
僕がそう答えると彼女は気の毒そうな顔で頷いた。
「高校生も大変ですね」
返事をしようとしたが僕の口の中はチャーハンでいっ
思出ししている。僕はお茶をごくりと飲んだ。
「七緒さん」
「はい」
八つ年上の彼女は素直な返事をする。
「今日はどうしてここへ？」
「お母さまが呼んでくださったの。お母さまと打ち合わ
結婚式の話だろ。しかし、新郎の親と新婦が何を話
母は偏屈な新郎の代わりにこの結婚話を進めるつもり
った七緒さんをデートに連れ出した。この恋愛でも結
閉じこもる兄なのだ。それが自身の恋愛でも結婚でも
。反対に僕は彼女とよく話をする。この結婚について何
。明日の天気や出身地の話、職場である保育園の子供の
「兄さんが婿養子にならなくて残念だな」
「どうして？」
「兄さんが七緒さんの苗字になると面白いじゃないです
偏屈者の兄の名は新一という。星七緒さんはキョトン
た作家を知らないらしい。
「七緒さんは本を読みますか？」
「試しにそう尋ねると、彼女は少し考えて答えた。
「最後に読んだのは確か『草枕』。あなたぐらいの頃に
「ずいぶん前だ」
「国語の教科書で読んだのよ」
種明かしをした彼女は肩をすくませた。気になって僕
「どんな話だったか覚えていますか？」
「男の人がお寺に行っていて、和尚さんと会うお話でしょ」
「やっぱりと僕は思った。七緒さんは教科書に載って
の一部分のだと教えようとしたが、それが兄の受け売り

「そ、う、い、え、ば、今、日、彼、女、を、呼、び、つ、け、た、母、は、ど、こ、へ、行、っ、た、
た、の、だ、そ、う、だ、。、鍵、を、持、っ、て、出、な、か、っ、た、僕、の、た、い、め、に、七、緒、さ、見、
僕、は、テ、ー、ブ、ル、の、上、で、組、ま、れ、た、彼、女、の、白、く、細、い、指、を、盗、み、見、
。、
秘、昼、食、を、終、え、た、僕、に、七、緒、さ、ん、は、お、茶、を、淹、れ、直、し、て、く、れ、た、
密、を、尋、ね、た、が、彼、女、は、教、え、て、く、れ、な、か、っ、た、。

定、期、試、験、の、最、終、日、僕、は、ま、た、喫、茶、店、で、兄、と、会、っ、た、。、着、
ら、う、。、食、後、の、夕、バ、コ、を、心、か、す、兄、に、僕、は、口、を、開、く、。、
「七、緒、さ、ん、あ、ま、り、本、を、読、ま、な、い、人、み、た、い、だ、ね、」
「そ、れ、が、ど、う、し、た、。、家、で、文、学、論、争、を、す、る、気、は、な、い、」
「兄、さ、ん、と、話、が、合、わ、な、い、と、思、う、け、ど、?」
煙、を、吐、き、出、し、て、兄、は、薄、く、笑、う、。、
「女、は、馬、鹿、な、方、が、い、い、だ、ろ、」
僕、は、黙、っ、た、。、偏、屈、で、頑、固、者、で、も、あ、る、兄、は、何、を、言、っ、て、自、
も、言、わ、ず、に、俯、い、た、。、
「そ、ん、な、こ、と、よ、り、今、週、の、日、曜、は、暇、か、?」
「テ、ス、ト、が、終、わ、っ、て、春、休、み、に、入、っ、た、僕、だ、か、ら、休、日、に、は、
旅、行、先、一、緒、に、選、ん、で、や、っ、て、く、れ、。、今、週、末、に、決、め、な、い、
そ、れ、が、新、婚、旅、行、の、話、で、あ、る、と、気、づ、い、て、僕、は、首、を、横、に、振、
「そ、ん、な、こ、と、で、き、な、い、よ、」
「お、前、は、彼、女、と、仲、が、い、い、だ、ろ、。、彼、女、だ、っ、て、う、ち、の、両、親、と、
兄、が、一、旦、言、い、出、し、た、ら、僕、た、ち、家、族、に、は、そ、れ、以、外、の、選、
そ、う、し、て、日、曜、日、僕、と、七、緒、さ、ん、は、二、人、で、パ、ン、フ、レ、ッ、ト、
な、顔、を、し、た、が、そ、の、後、は、笑、顔、で、応、対、し、て、く、れ、る、。、
「定、番、で、す、が、ハ、ワ、イ、は、人、気、で、す、よ、」
「そ、う、ね、え、」
「ヨ、一、口、ッ、パ、な、ど、は、い、か、が、で、し、ょ、う、。、そ、れ、と、も、世、界、遺、
「そ、う、ね、え、」
今、日、の、七、緒、さ、ん、は、お、か、し、か、っ、た、。、ぼ、ん、や、り、と、た、だ、パ、ン、
く、る、が、ど、の、場、所、を、勸、め、ら、れ、て、も、生、返、事、ば、か、り、だ、。、
「ほ、ら、七、緒、さ、ん、。、海、外、が、い、や、な、ら、国、内、は、ど、う、?、沖、縄、と、
「そ、う、で、す、ね、。、屋、久、島、な、ど、も、人、気、で、す、。、パ、ン、フ、レ、ッ、ト、お、
係、り、の、人、が、席、を、立、っ、た、隙、に、僕、は、彼、女、に、囁、い、た、。、
「実、際、ど、こ、が、い、い、ん、で、す、か、?」
「ど、こ、が、い、い、と、思、う、?」
「七、緒、さ、ん、は、ど、こ、が、い、い、ん、で、す、?」
「お、兄、さ、ん、は、ど、こ、が、い、い、の、か、し、ら、ね、」

僕は虚をつかれ黙った。七緒さんは小首を傾げてパン
「どうして兄さんの行きたいところにする必要があるん
「そういうわけにはいかないわ」
「どうして。兄さんはここに来なかつたのに」
「だって、新一さんとわたしは夫婦になるんですもの」
彼女が兄の名を呼んだ。僕は初めてそれを聞いた。
だから僕はここで初めて、七緒さんは兄さんの嫁にな
「あんな奴のどこがいいんです」
いつの間にか僕は彼女の手を掴んでいた。飾り気のな
七緒さんがこちらを向いた。真正面から向き合う眼と
僕は彼女が好きなのだ。兄の許婚である七緒さんが好
七緒さんはゆっくりと笑った。口の端をちょっと上げ
「駄目よ、伸二君」
幼い子の悪戯をたしなめるようにそう言った。その言
帰り道は二人きり。
普段と何も変わらない。いつものように他愛もない話
特急列車が通過して、七緒さんは風に煽られた髪を押
「大学教授の年取っていくらか知ってる？」
「え？」
僕はドキリとした。言葉の意味に気がついて、まじま
「お兄さんは頭がいい。きつと今に教授になるわ。彼な
ホームに電車が入ります。アナウンスがそう告げる。
。」「わたしは何の取り柄もない人間だけど、これで結構打
滑り込んできた電車に彼女は乗り込む。閉まったドア
ってそれに応える。
ゆっくりと電車は動き出した。見送った僕は兄のこと
今の僕は当時の兄と同じ年齢だけれども、僕は線路に
な気持ちはわかれないだろう。
そして、僕は彼女もよくわかんなかつた。よく知って
人だった。僕の想像通り馬鹿な人ではなかつたけれど、
半年後、兄と七緒さんは結婚をした。

本とキム子とスイカパー

人口よりも野鳥が多い。住宅地より田んぼが広い。市
7月の星は四方、その八方に超常現象はここを放ち、騒ぎ起る。ぼが落ちた。市
落の様子を撮影し、超常現象はここを放ち、騒ぎ起る。ぼが落ちた。市
のけれど、本は、テレビの超常現象はここを放ち、騒ぎ起る。ぼが落ちた。市
きっかけは、テレビの超常現象はここを放ち、騒ぎ起る。ぼが落ちた。市
わからず驚いた。テレビの超常現象はここを放ち、騒ぎ起る。ぼが落ちた。市
ぎになつた。テレビの超常現象はここを放ち、騒ぎ起る。ぼが落ちた。市
数週間、光を浴びた人間が何らかの特殊能力に目覚め
『流れ星のこの町にいた全員が各々個別の特殊能力を持っ
戸惑った。自覚症状など何能力が何なのか探り始めた。テ
判明していった。

例えば、野菜を握っただけで賞味期限がわかる奥さん
例えば、面と向かった相手の実年齢がわかってしまおう
例えば、つぼみを見ると何日後に花が咲くのかわかる

全国のお茶の間、皆さんが期待するような特殊能力を
力は使えば、町からは野次馬が消え、テレビの人間が消
いっしょには、町からは10年前の話である。
それが今から

須藤貴司は畳の上で寝転がって天井を見ていた。昼寝

クーラ一なんて高なものはこの部屋にないから、ゆ
しのがなければうつつ。加えて開けた窓から聞こえ
い方に寝返りをうつつ。加えて開けた窓から聞こえ

「誰だよ、こんな場所には商店街にあって、反対側に
自分対するこの場所は商店街にあって、反対側に
貴司のいるこの場所は商店街にあって、反対側に
二階を開放したのはみんなが川遊びに出かけてしまっ
でここに

この部屋にはいろいろなものが置いてある。漫画、オ
本はオナーの一や近所の大人たちが寄付してくれ
積んだ。その六年生の貴司にも読書感想文の宿題
ましよ、ね、な。担任の先生は言っていた。「感
「感想文、苦手なんだよな」
憂鬱な顔で貴司は起き上がり本の山を見る。ただでさ
い。どうせ暇だし、本ぐらいは選んでおこう。
貴司は本のタイトルをじっくりと観察した。見たとこ
え、一冊を掴んで目を閉じた。

ストーリーが頭の中を駆け巡る。

「... .. 感想が書きにくそうな話だ。ハズレかあ」
目を開け本を放り出す。
10年前、2歳だった貴司も星の光を浴びた。貴司の
。ただし、この能力は小説のみに有効な上、一度に多く
いに襲われる。不便なこの上ない能力だ。
一冊目がハズレだったのやめる気がなくなり、貴司は
聞こえ、五年生のキム子が顔を覗かせた。
「あ、タカヤン。一人でどうしたの？」
木村裕子。略してキム子。ここでは、年の近いものは
「キム子こそ、川に行かなかったのか？」

「うん」
貴司の足元に散らばった文庫本に目を留め、キム子は
「もう、散らかしたの誰？」

「オレじゃないって」
「知っているよ。タカヤン、本に触るの嫌いだもんね」
キム子は手早く本を集めると棚に戻していった。貴司
再び、階段を上がってくる音がした。現れたのは、下

た一美さんは何故かオナーに惚れてこの町にやっ
「暑いでしょ。はい、これ」
その一美さんはアイスを持っていった。スイカバ
カバの一の上でぶつか。どちらにも引く気はない。

「早く決めないのと、とけちゃうわよ」
「一美さんが楽しんでそうに言う。キム子は、名案がある」と
「よし、タカヤン。ここは公平にじゃんけんで決めよ」
「嫌だね」
「10年前は1歳だったキム子も特殊能力を持っている
のだ。この連中はみんなそれを知っただけから、キム
子、偶数と奇数のどっち？」
「... 偶数」
「神妙な顔でキム子が答える。貴司はサイコロを転がし
「いったできます！」
「嬉々としてキム子はスイカバ一の袋を開ける。対照的
を見ても一美さんが笑う。
「オナ、スイカバ一をいっぱい買ってくるよう頼
「お願いします」
「ふくれたままです。そう言った貴司に向かってキム子は赤
カケリをしたことがない下級生がいるというので、
「ただし、貴司たちのカケリは普通とちょっと違っている
カッちゃんはその辺にある軽い物を一瞬だけ浮かせる
れた場所からカンを倒してしまおうので、鬼が泣く羽目に
三回ぐらいうたところ、カッちゃんが飽きたと言
に「行く」という話になった。
「そういうわけで、貴司は昼ごはんの後、また喫茶店の
、昨日と同じようにキム子がやってくる。
「タカヤン、タカヤン、聞いて！」
「キム子、カケリ来なかったら」
「川へも行かなければいい。文句を言いながら貴司は
「イケメンを発見した」
「こんな田舎にイケメンがいるのか？」
「都会から来た人。源さんのお孫さん！」
「源さんとは町の外れの田んぼをいつも耕しているおじ
「お孫さんいたんだ」
「小6だっけ。さっき見に行ったら家の中で読書してた
「貴司は眉をしかめた。
「ね、ね、タカヤンも一緒に見に行こう」
「何でオレが？」

「イケメンと同じ年です。話しかけて友達になって！」
「お断り」
と「貴司は再び寝転がった。キム子はしばらく文句を言っ
と思いはながら貴司はその後姿を見送る。
喋る。夕方になり、そろそろ帰ろうかと伸びをしていると、
「宮内くんってすごいんだよ。本をたくさん読んでいるの
ハマってるんだって！」
「イケメンの苗字は宮内というらしい。そういえば源さ
宮内の素晴らしさを好きなだけ語り、キム子は帰って
サガ何とかという作者の本は本棚の中になかった。
次の日。
みんなは朝から泳ぐと言うので、貴司はいつものよう
えのない少年と談笑している。
「あれが、源さんのお孫さんの...」
遠目に見たが、細っこくて色白で眼鏡をかけていて、
ている。
2人が駄菓子屋へ入るのを見て、貴司は気づかれない
に「あるアイスクラスに向かっている。
私、スイカバが好きなんです」
「僕も好き。ああ、でもスイカバを食べるのは久しぶ
仲間よく笑いながら2人は店のおじさんに、スイカバ
「ごめんねえ。売れちゃって1個しか残ってないんだよ
キム子と宮内は顔を見合わせた。先に口火を切ったの
「木村さん食べないよ。楽しみにしてただろ」
「ううん、私はいいよ。宮内くんこそ、久しぶりなんで
「僕はいいよ。木村さんこそ...」
「あ、じゃあ、じゃんけんしない？」
宮内は笑って頷く。
「そうだね。じゃあ、うらみっこなしで」
「じゃんけんほい。
宮内が出したのはグー。キム子が出したのはチョキ。
それを見て貴司は店の前から離れた。
喫茶店の二階で汗を流しながら寝転がっていると、一
こに当てる。
「はい。オナーがたくさん買ってきてくれたよ」
「...商店街の駄菓子屋で？」

「うん。よく知ってるね」

「オナーは昔から間が悪いんだ」

「貴司は起き上がってスイカバ一の袋を破った。その横」

「タカシくん、どうしたの？元気ないよ」

「暑いんだよ」

「キムちゃん、宮内くんと仲良くなれたみたいだね」

「思わず振り向くと、一美さんは人の悪い笑みを浮かべ」

「驚いた？一美さんは何でもお見通しなのだ」

「貴司は視線を逸らしスイカバ一をかじる。」

「キム子ってああいうのがタイプなの？」

「どうして？」

「キム子、わざとじゃんけんにかけて、あいつにスイカ」

「ふうん」

「オレが相手なら絶対負けないくせに」

「一美さんは楽しそうに笑った。貴司が睨むと謝りながら」

「この町には宮内くんみたいな草食系男子がいらないから」

「あいつ、頼んないよ。本を読むのが好きなんだって。」

「アガサ・クリスティね。ミステリ一の女王と言われて」

「なトリックを使った話が多いの。最後まで読んだらね、」

「そんなのどこが面白いんだよ。全然、わかんない」

「貴司は乱暴にスイカバ一を噛み砕く。」

「まあまあ、張り合うな、少年」

「張り合ってない」

「でも、本当にキムちゃんが宮内くんのことが好きなん」

「うんだって」

「頭の中に、楽しそうに宮内のことを話すキム子の姿が」

「夏休み中いるんじゃないの？」

「最初から一週間の予定だったらしいよ」

「キム子は知ってるの？」

「さあね」

「貴司の頭の上に手を置いて、一美さんは優しく言う。」

「そんな顔しなさんな。これからどうするのかは、キム」

「次の日の朝はみんなでサッカ一をやったが、やはり昼」

「こから抜けて喫茶店の二階へ向かう。」

「今日は先客がいた。キム子だ。膝を抱えて部屋の隅で」

「サッカ一来なかったな」

「失恋しちゃったの」
キム子はそう答えた。
「この町はすごく遠い場所で、木村さんはこの町の人だ
「そう」
貴司は寝転がった。そして、すすり泣くキム子の声を
そしてまた次の日。貴司はカッちゃんを誘ってバス停
中には宮内の姿もあった。宮内は本を読んでいる。付き
それを確認して、貴司はカッちゃんと2人で歩き出し
、貴司が宮内の前に差しかけた。その時。
「あ...」
前触れもなしに宮内が本を取り落とされた。貴司は目の
立ち上がって目を開け、宮内に本を手渡した。
「どうぞ」
「ありがとう」
お礼を言う宮内に、貴司は笑って言った。
「オリエント急行殺人事件か。この本、面白いですよね
複雑な顔でバスに乗って去っていく宮内を貴司とカッ
「なあ、タカちゃん。これどういうこと？」
個人的な仕返し。協力してくれてありがとう、カッち
「本を浮かせるぐらい余裕だっただけ」
突然浮き上がった本を宮内は取り落とされた。それを貴
結末のわかった推理小説を宮内は読むだろうか。あの
など読む必要なんてない。
けれど、こっちは結末がわかっていても、本のページ
川へ遊びに行くとカッちゃんとは別れて、貴司は喫茶店に
さんにアイスもらい、貴司は階段を上がった。
「キム子、スイカバ―とバナラアイス、どっちがいい？
「...スイカバ―」
「オレも。じゃあ、じゃんけんで決めよう」
キム子が目線だけ上げて貴司を見た。
「いくぞ、じゃんけんほい」
貴司が出したのはグー。
キム子が出したのはパー。
「...はい、どうぞ」
スイカバ―をキム子に手渡し、貴司はバナラアイスの

小雨

<http://p.booklog.jp/book/13763>

著者：川辺都

プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/myako4140/profile>

H P：<http://rainmoon.net/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13763>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/13763>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.